六尾遺跡・六尾南遺跡試掘調査
馬場笹カ遺跡・摩湯北遺跡発掘調査概要

－ 農用地総合整備事業六尾・馬場・摩湯団地 －

２００１.３

大阪府教育委員会

はしがき

本府における圃場整備も最近は都市部近郊から周辺部へと移り、遺跡外で行われることも多くなってまいりました。その結果、従来知られていなかった所で新たな遺跡が相次いで発見されるようになりました。

今回、ご報告いたします馬場笹カ遺跡、摩湯北遺跡も昨年度の試掘調査により発見された遺跡であります。今年度の調査規模は小さかったのですが、初めての本格的な発掘調査でありました。人間が各遺跡に関係を持っていた時代や水田開発の開始時期等が明らかになったことは、今後、両遺跡を解明するための第一歩であります。将来調査を繰り返すことにより、両遺跡および周辺地域のいろいろな歴史的事実が明らかになっていくものと思われます。

その反面、従来から遺物散布地としてマークされていた六尾遺跡、六尾南遺跡は確かに古墳時代以降の遺物を出土いたしましたが、非常に少量で、明確な遺構等は確認できませんでした。しかし、全く何も無いというのではなく、確かに過去において人間が生活していた場所に近接していたことは明らかですし、中世以降は人間生活に非常に密接な地域であったことは明らかです。ただ、今回の試掘調査では本格的な発掘調査の必要性を認めませんでしたが、人間との関わりをいつ頃から持って来たのかを明らかにできるように今後もいろいろな調査方法を駆使してまいるつもりであります。近い将来、周辺地域に広がる遺跡との関連等を明らかにしていきたいと考えております。

発掘調査、試掘調査の実施にご協力いただきました地元の皆さま並びに関係機関に深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財行政へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　小林　栄

例　言

1．本書は、農用地総合整備事業六尾団地に係わる六尾遺跡・六尾南遺跡の試掘調査、および馬場団地に係わる馬場笹カ遺跡、摩湯団地に係わる摩湯北遺跡の発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、緑資源公団西部支社の委託を受けて大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。

3．調査は、大阪府教育委員会事務局文化財保護課主査藤澤真依を担当者として、平成12年11月より平成13年３月まで行った。

4．発掘調査・遺物整理および本書作成に要した経費は、文部科学省と農林水産省の補助を受けた大阪府教育委員会と緑資源公団が負担した。

5．本書に使用した座標は、国土座標第Ⅵ座標系に基づき、方位は座標北、標高はＴ．Ｐ．で示している。

6．写真測量は、摩湯北遺跡を株式会社フジコー堺支店、馬場笹カ遺跡を大阪測量株式会社に委託した。なお、撮影フィルムは上記２社において保管している。

7．遺物写真撮影は（有）阿南写真工房に委託した。

8．本書は藤沢が執筆、編集した。

本　文　目　次

第１章　六尾遺跡、六尾南遺跡試掘調査…… 1
　第１節　調査結果…… 1
　第２節　まとめ…… 8
第２章　馬場笹カ遺跡発掘調査…… 8
　第１節　調査結果…… 8
　第２節　まとめ…… 14
第３章　摩湯北遺跡発掘調査…… 14
　第１節　調査結果…… 14
　第２節　まとめ…… 17

挿　図　目　次

第１図　六尾遺跡・六尾南遺跡位置図…… 2
第２図　試掘トレンチ配置図…… 3
第３図　土層断面模式図…… 7
第４図　馬場笹カ遺跡位置図…… 9
第５図　発掘調査区配置図、遺構平面図、基本土層断面模式図…… 10
第６図　摩湯北遺跡位置図…… 13
第７図　発掘調査区配置図…… 14
第８図　遺構平面図、基本土層断面模式図…… 16

図　版　目　次

図版１　六尾遺跡試掘トレンチ

第１トレンチ　第２トレンチ

第３トレンチ　第４トレンチ

第８トレンチ　第９トレンチ

第10トレンチ　第11トレンチ

図版２　六尾遺跡、六尾南遺跡試掘トレンチ

第12トレンチ　第13トレンチ

第14トレンチ　第15トレンチ

第16トレンチ　第18トレンチ

第19トレンチ　第20トレンチ

図版３　馬場笹カ遺跡航空写真

図版４　馬場笹カ遺跡

第１調査区（東南から）　第２調査区（西北から）

図版５　馬場笹カ遺跡

第３調査区（西北から）　第４調査区（西南から）

図版６　馬場笹カ遺跡

第５調査区（西南から）　第６調査区（西北から）

図版７　摩湯北遺跡航空写真

図版８　摩湯北遺跡

第１調査区（西南から）　第２調査区（西北から）

図版９　摩湯北遺跡

第２調査区全景（東南から）　第２調査区ＳＤ001（東南から）

図版10　摩湯北遺跡

第３調査区全景（西南から）　第４調査区全景（東北から）

図版11　出土遺物

馬場笹カ遺跡出土遺物　摩湯北遺跡出土遺物

図版12　出土遺物

摩湯北遺跡出土遺物　摩湯北遺跡出土遺物

第１章　六尾遺跡、六尾南遺跡試掘調査

農用地総合整備事業の一貫として行われるもので、いわゆる圃場整備事業である。事業予定面積は20haであり、点在するように19箇所にトレンチを設定し、117㎡を調査した。

第１節　調査結果

第１トレンチ

金熊寺川から試掘調査範囲の中央を通る農道を少し上った東側の水田に長軸に直交するように設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はＴ．Ｐ．＋49.1mである。

堆積土は７層あり、0.95mで黄色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.2m、②黄灰色粘土が0.05m、③灰色粘土・黄色粘土・灰色土ブロックが0.2m、④灰色土が0.05m、⑤灰黄色粘土が0.05m、⑥灰色シルトが0.15m、⑦灰色粘土が0.25m堆積していた。①層は現在の耕作土であり、②層は床土である。③層は現在の水田形状にしたときの盛り土と考えられる。④・⑤層はそれ以前の耕作土と床土と考えられる。

どの層からも遺物は出土せず、どの面からも遺構は検出されなかった。

水田面は２面あり、現在の水田面ができあがるときに⑨層の黄色粘土の混じるブロック土を積み上げていることから、丘陵裾部を削り水田面を拡張したようであるが、時期は不明である。それ以前の④層を耕作土としていた時期も不明である。

第２トレンチ

第１トレンチから農道をわたり、南西に段を下った水田に南北方向に設定した幅1.5m、長さ4.0m、のトレンチである。標高はＴ．Ｐ．＋46.5mであり、面的には第１トレンチよりも１段低い。

堆積土は0.7mまで掘削し、３層確認したが、湧水がひどく、下層は未確認である。上から①黒灰色土が0.2m、②灰色粘土が0.15m、③灰色粘土が0.35m以上堆積していた。①層は現在の耕作土であり、②・③層は同じような粘土層であるが、③層上部0.05mが黄色に変色しており、明確に分離できる。

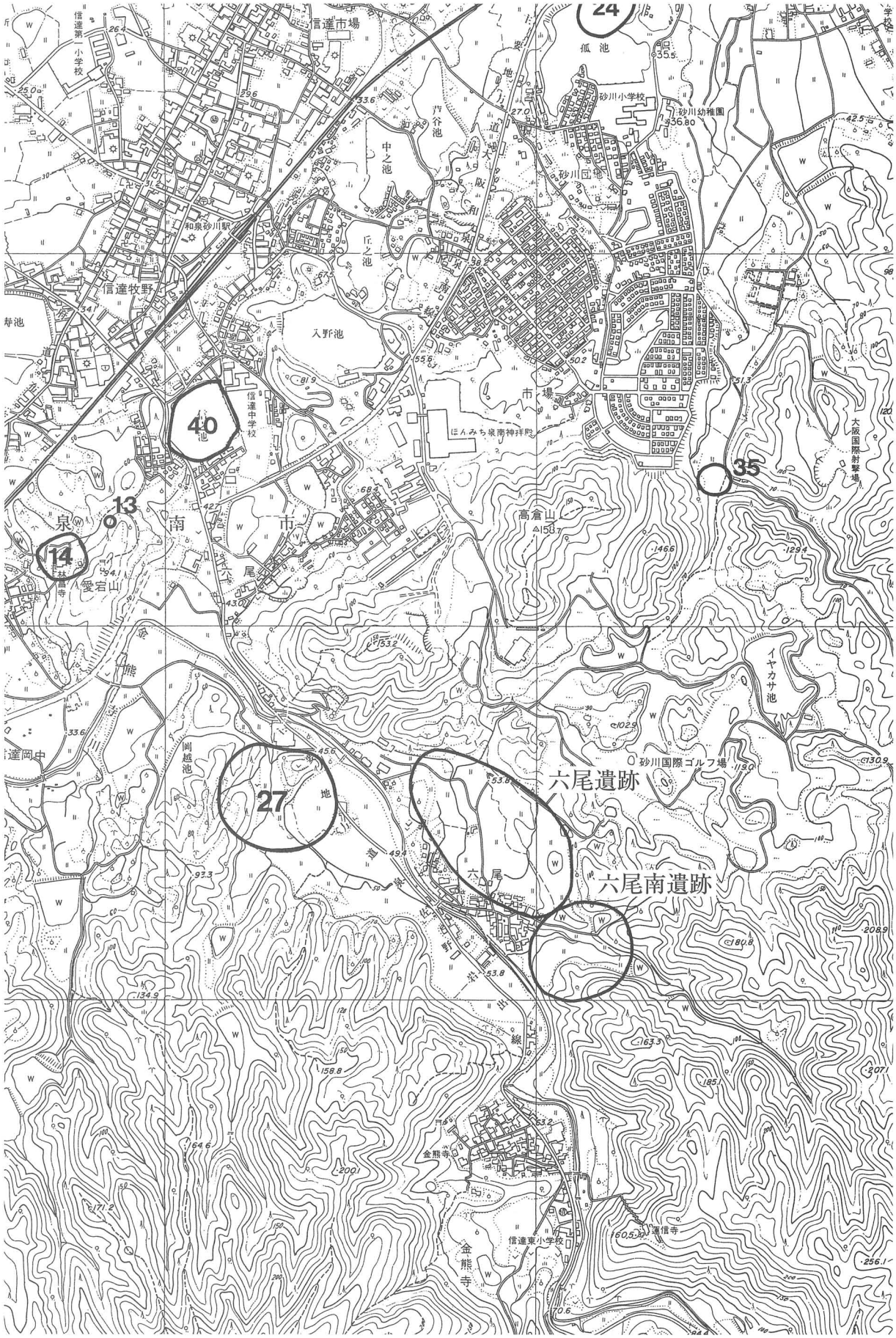
どの層からも遺物は出土せず、どの面からも遺構は検出されなかった。

第３トレンチ

第２トレンチから南へ50m離れたところで、南北方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はＴ．Ｐ．＋47.6mであり、面的には第２トレンチと同一面である。

堆積土は0.75mまで掘削し、４層確認したが、湧水がひどく、下層は未確認である。上から①黒灰色土が0.15m、②茶褐色土が0.05m、③灰褐色砂が0.1m、④褐色砂礫が0.45m以上堆積していた。①層は現在の耕作土であり、②層は③層上部に部分的に確認できる土層である。④層は河川堆積と考えられるが、時期は不明である。

どの層からも遺物は出土せず、どの面からも遺構は検出されなかった。



第１図　六尾遺跡・六尾南遺跡位置図

第４トレンチ

第３トレンチから東へ約60m離れたところで、南北方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はＴ．Ｐ．＋51.3mであり、面的には第３トレンチより１段高く、第１トレンチとほぼ同じである。

堆積土は１層であり、灰黒色土が0.15mのみで、黄色粘土の基盤層となる。灰黒色土は現在の耕作土であり、西側の水田とほぼ同一面であることから、当水田部分を削り、西側の水田へ盛り土したと考えられる。

遺物は出土せず、遺構も検出しなかった。

第５トレンチ

当初設定したが、未調査になったトレンチである。

第６トレンチ

第４トレンチから東に約100m離れたところで、南北方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はＴ．Ｐ．＋57.0mであり、面的には第４トレンチよりもさらに１段高く、南から伸びてくる尾根の先端部分に当たる。

堆積土は３層で、0.45mで白色粘土の基盤層となる。上から①灰黒色土が0.15m、②灰色粘土・白色粘土ブロックが0.15m、③白色粘土・灰色粘土ブロックが0.15m堆積している。①層は現在の耕作土であり、②・③層は南側の尾根を削った盛り土と考えられる。

第２図　試掘トレンチ配置図

遺物は出土せず、遺構も検出しなかった。

第7トレンチ

第6トレンチから東南方向に約100m離れたところで、南北方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はT.P.+60.4mであり、面的には第6トレンチと同一面であるが、第6トレンチの尾根と範囲外の丘陵部分との間に当たる。すぐ東側の上には池が丘陵裾部に連なっている。

堆積土は4層で、部分的に1.75mまで掘削したが、基盤層は確認できなかった。上から①灰黒色土が0.15m、②灰色粘土・黄色粘土ブロックが0.2m、③黄色粘土・灰色粘土ブロックが0.25～0.4m、④灰色粘土が1.15m以上堆積している。①層は現在の耕作土であり、②・③層は現在の水田造成時に南側の尾根を削った盛り土と考えられる。④層は非常に柔らかい粘土でることから、現水田造成以前は池であったと考えられる。

遺物は出土せず、遺構も検出しなかった。

第8トレンチ

第3トレンチから東方向に約130m離れたところで、南北方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はT.P.+48.3mであり、面的には第3トレンチと同一面である。今回の調査の中では最も金熊寺川に近いトレンチであり、100m離れているだけである。

堆積土は0.55mまで掘削し、3層確認したが、湧水がひどく、下層は未確認である。上から①黒灰色土が0.15m、②茶灰色土が0.1m、③灰褐色礫が0.3m以上堆積していた。③層は河川堆積と考えられるが、時期等は不明である。

遺物は出土せず、遺構も検出しなかった。

第9トレンチ

第8トレンチから東方向に約40m離れたところで、南北方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はT.P.+49.7mとわずかに高くなっており、面的には第2・3トレンチより微妙に高い面であり、次の第10トレンチとの中間的な面となっている。

堆積土は0.85mまで掘削し、4層確認したが、基盤層は未確認である。上から①黒灰色土が0.15m、②灰色粘土が0.05m、③灰色粘土が0.3m、④茶褐色礫が0.35m以上堆積している。①層は現在の耕作土であり、②・③層は第2トレンチ②・③層と同一層と考えられる。④層は第3・8トレンチの③層と同一の河川堆積と考えられるが、時期等は不明である。

遺物は出土せず、遺構も検出しなかった。

第10トレンチ

第9トレンチから東方向に約20m離れたところで、南北方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はT.P.+51.4mであり、高くなっており、面的には第4トレンチと同一面である。

堆積土は5層で、0.95mで黄色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.15m、②灰色粘土

が0.05m、③灰褐色粘土が0.1m、④黄褐色粘土が0.35m、褐色粘土が0.3m堆積している。①層は現在の耕作土であり、②層は床土である。③層は基本的には④層と同一層と考えられるが、④層は上部約0.1mが黄色に変色しており、③層と明確に分けられる。⑤層は通常よく遺物を包含する層に似ているが、遺物は出土しなかった。

どの層からも遺物は出土せず、どの面からも遺構を検出しなかった。

第11トレンチ

第10トレンチから東方向に約20m離れたところで、南北方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はT.P.+51.9mであり、面的には第10トレンチと同一面である。

堆積土は5層で、0.7mで黄色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.2m、②灰色粘土が0.05m、③灰色粘土（マンガン粒を含む）が0.15m、④灰色粘土が0.2m、⑤灰色粘土（マンガン粒を含む）が0.1m堆積している。①層は現在の耕作土である。②～⑤層は基本的には同一層と考えられるが、②層は床土であり、③層は上部約0.05mが黄色に変色しており、③・⑤層はマンガン粒を含むため④層と分けられる。

どの層からも遺物は出土せず、どの面からも遺構を検出しなかった。

第12トレンチ

第11トレンチから東方向に約30m離れたところで、東西方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はT.P.+52.9mであり、面的には第11トレンチと同一面である。

堆積土は4層で、0.7mで黄色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.15m、②灰色粘土が0.05m、③灰色粘土が0.3m、④灰褐色粘土が0.2m、堆積している。①層は現在の耕作土である。②～③層は基本的には同一層と考えられるが、③層の上部約0.05mが黄色に変色しており、②層と分けられる。④層は第10トレンチの⑤層よりもわずかに灰色っぽいがよく似ており、須恵器の破片が1片出土した。

他の層からは遺物が出土せず、どの面からも遺構を検出しなかった。

第13トレンチ

第12トレンチから東方向に約30m離れたところで、東西方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はT.P.+53.8mであり、面的には第12トレンチと同一面である。

堆積土は7層で、0.7mで黄色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.15m、②灰色土・黄色粘土ブロックが0.1m、③灰色土が0.05m、④黄灰色土が0.1m、⑤灰黄色土が0.1m、⑥灰色土が0.05m、⑦褐色土が0.15m堆積している。①層は現在の耕作土である。②層は現水田造成時の盛り土と考えられる。③～⑥層は基本的には同一層と考えられるが、色合いが微妙に異なっているため分けた。⑦層は第12トレンチの④層よりもわずかに土っぽいがよく似ている。

どの層からも遺物は出土せず、どの面からも遺構を検出しなかった。

第14トレンチ

第13トレンチから東方向に約40m離れたところで、南北方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mの

トレンチである。標高はT．P．+59.5mであり、面的には第6・7トレンチと同一面である。堆積土は2層で、0.3mで黄色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.15m、②黄灰色土が0.15m堆積している。①層は現在の耕作土である。

両層とも遺物は出土せず、どの面からも遺構を検出しなかった。

第15トレンチ

第12トレンチから南方向に約80m離れたところで、東西方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はT．P．+54.2mであり、面的には第12・13トレンチと同一面である。

堆積土は3層あり、0.8mで黄色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.2m、②灰色土が0.15m、③灰黄色粘土が0.45m堆積している。①層は現在の耕作土である。②層の上部0.05mは黄色に変色している。

どの層からも遺物は出土せず、どの面からも遺構を検出しなかった。

第16トレンチ

第15トレンチから東南方向に約50m離れたところで、東西方向に設定した幅1.5m、長さ6.0mのトレンチである。標高はT．P．+55.7mであり、面的には第15トレンチと同一面である。堆積土は2層あり、0.55mで黄色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.2m、②灰色粘土・黄色粘土ブロックが0.4m堆積している。①層は現在の耕作土である。②層は現水田造成時の盛り土と考えられる。

どの層からも遺物は出土せず、どの面からも遺構を検出しなかった。

第17トレンチ

第15トレンチから東方向に約120m離れたところで、南北方向に設定した幅1.5m、長さ4.0mのトレンチである。標高はT．P．+58.3mであり、面的には第15・16トレンチより高くなった面である。

堆積土は4層で、0.8mで黄色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.2m、②灰色粘土が0.15m、③黄色粘土・褐色粘土ブロックが0.2m、褐色粘土が0.25m堆積している。①層は現在の耕作土であり、②層は床土である。③層は現水田造成時の盛り土と考えられる。

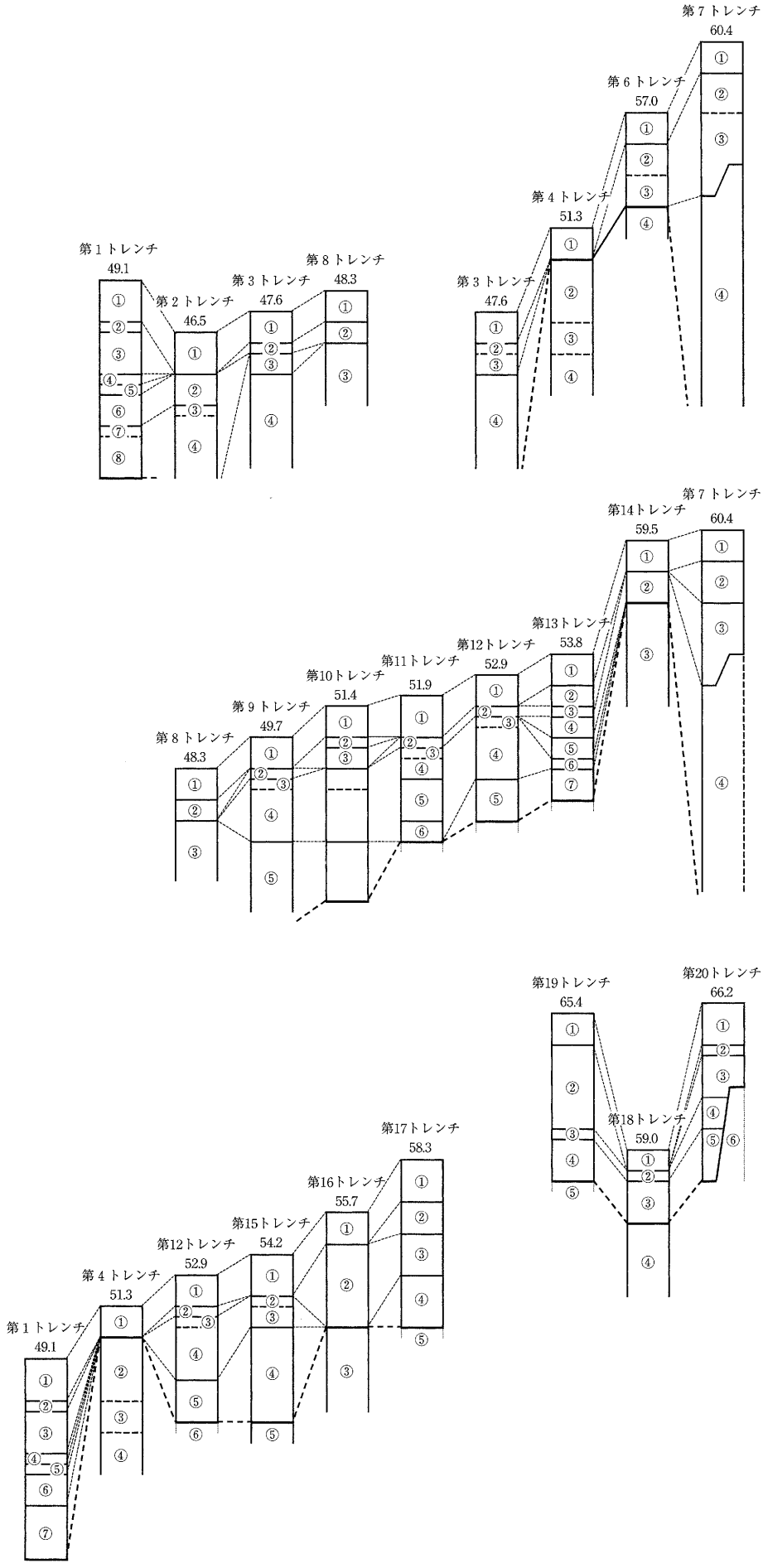
どの層からも遺物は出土せず、どの面からも遺構を検出しなかった。

第18トレンチ

第17トレンチから東方向に約140m離れており、南端で南東方向に伸びる谷から流れ出る川を渡った反対側斜面に当たる。幅1.5m、長さ4.0mの東西方向に設定したトレンチである。標高はT．P．+59.0mであり、第1～17トレンチまでの斜面よりも急な斜面を開発して水田にしている。

堆積土は3層で、0.35mで灰白色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.1m、②灰色土が0.05m、③黄茶色粘土が0.2m堆積している。①層は現在の耕作土であり、②層は床土である。

どの層からも遺物は出土せず、どの面からも遺構を検出しなかった。


第1トレンチ
49.1
第2トレンチ
46.5
第3トレンチ
47.6
第8トレンチ
48.3
第3トレンチ
47.6
第4トレンチ
51.3
第6トレンチ
57.0
第7トレンチ
60.4
第8トレンチ
48.3
第9トレンチ
49.7
第10トレンチ
51.4
第11トレンチ
51.9
第12トレンチ
52.9
第13トレンチ
53.8
第14トレンチ
59.5
第7トレンチ
60.4
第1トレンチ
49.1
第4トレンチ
51.3
第12トレンチ
52.9
第15トレンチ
54.2
第16トレンチ
55.7
第17トレンチ
58.3
第19トレンチ
65.4
第18トレンチ
59.0
第20トレンチ
66.2

第3図　土層断面模式図

第19トレンチ

第18トレンチから南東方向に約100m離れたところで、幅1.5m、長さ4.0mで南北方向に設定したトレンチである。標高はT．P．+65.4mである。

堆積土は4層で、0.8mで黄白色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.15m、②黄色粘土・黄灰色土ブロックが0.4m、③灰色土が0.05m、④黄灰色粘土が0.2m堆積している。①層は現在の耕作土であり、②層は現水田造成時の盛り土と考えられる。

どの層からも遺物は出土せず、どの面からも遺構を検出しなかった。

第20トレンチ

第18トレンチから西方向に約70m離れた斜面上部で、幅1.5m、長さ4.0mで南北方向に設定したトレンチである。標高はT．P．+66.2mである。

堆積土は5層で、0.85mで黄色粘土の基盤層となる。上から①黒灰色土が0.2m、②灰色粘土が0.05m、③灰色土・黄色粘土ブロックが0.2m、④灰色土が0.15m、⑤黄灰色土が0.25m堆積している。①層は現在の耕作土であり、②層は床土である。③層は現水田造成時の盛り土と考えられる。④層は水田造成時以前の表土層である。

③層から瓦器・土師器の小破片が出土した。13世紀末から14世紀の瓦器碗である。他の層からは遺物が出土せず、どの面からも遺構を検出しなかった。

第2節　まとめ

第10～12トレンチ付近にはいわゆる遺物包含層と考えられるような層があり、須恵器の破片も出土した。古墳時代の須恵器であり、周辺にその時代の人々が生活していたことには間違いないのであろうが、六尾遺跡で生活していたのか、それとも利用していただけなのかを考えると、利用していた地域と考える方が無難なようである。

第2章　馬場笹カ遺跡

昨年度、大阪府が行った試掘調査の結果、新たに分布図に載った中世の遺跡である。遺跡範囲はきわめて狭く、約12,000㎡である。その内今回は330平方メートルを調査した。

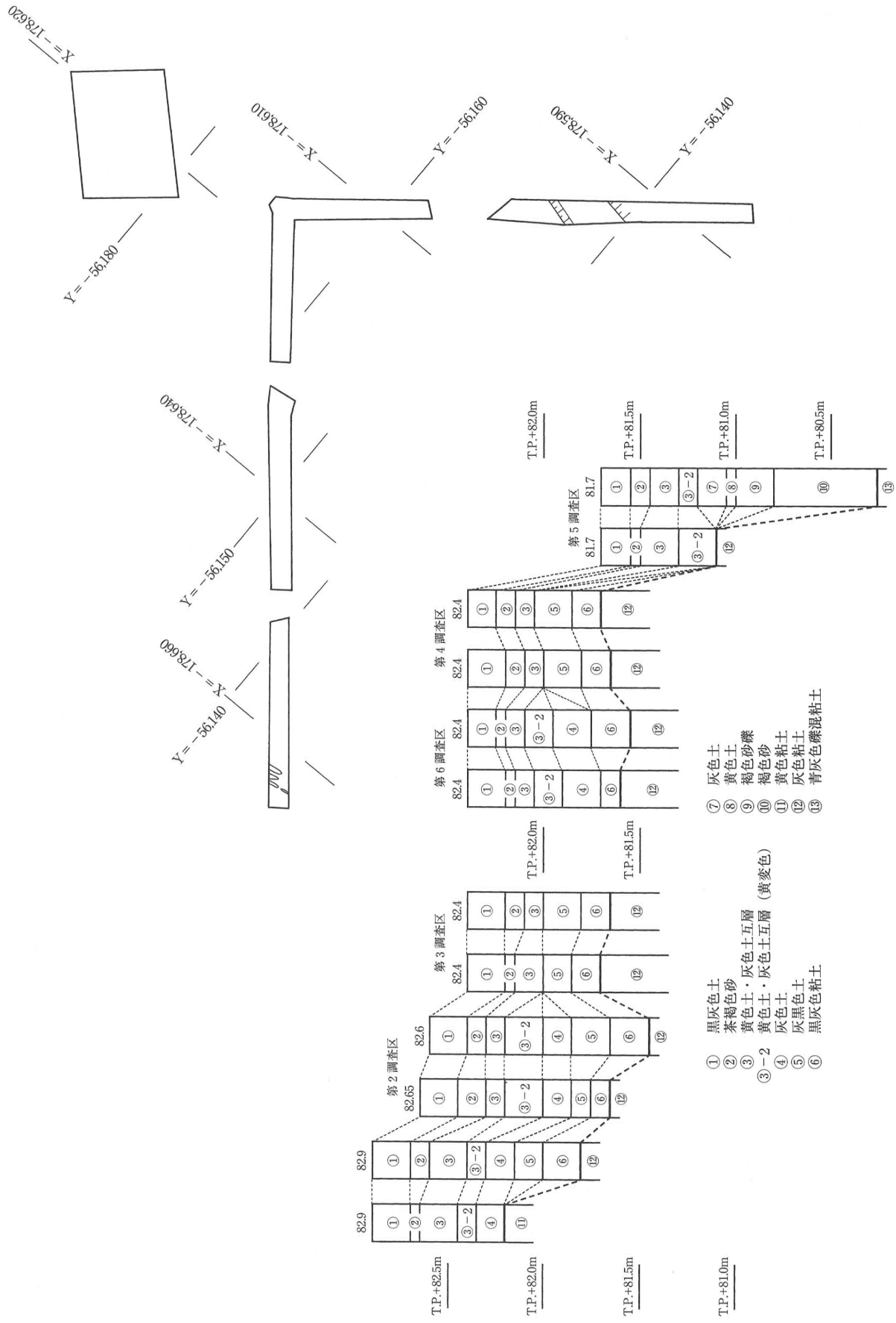
第1節　調査結果

圃場整備範囲は矩谷川左岸から西方向に伸びる谷部分である。谷の奥までは約300m程度あり、面積にして約4haである。遺跡は谷の西側出口付近のみである。当事業により削平される部分および水路建設により掘削される部分を水田畦畔等により5区に分割して調査した。第1～4調査区は水路部分であり、第5調査区は削平される部分である。

第1調査区

幅2.0m、長さ20.0mの西南から東北方向のトレンチである。標高T．P．+82.9mの水田であ

第4図　馬場笹カ遺跡位置図



第5図　発掘調査区配置図、遺構平面図基本土層断面模式図

り、西南端では、堆積層が５層あり、Ｔ．Ｐ．＋82.2mで基盤層の⑪黄色粘土となる。上から①灰黒色土が0.2m、②茶褐色砂が0.05m、③黄色土・灰色土互層が0.2m、③－２黄色土・灰色土互層（黄変色）が0.1m、④灰色土が0.15m堆積しており、⑪となる。東北部では、堆積層が７層あり、Ｔ．Ｐ．＋81.8mで基盤層の⑫灰色粘土となる。上から①黒灰色土が0.2m、②茶褐色砂が0.1m、③黄色土・灰色土互層が0.2m、③－２黄色土・灰色土互層（黄変色）が0.1m、④灰色土が0.15m、⑤灰黒色土0.15m、⑥黒灰色粘土が0.2m堆積している。①層は現在の水田耕作土であり、②層は床土である。③・③－２層は古い時期の水田耕作土と考えられるが、明確な時期は不明である。④層は当地域の水田開発以前の堆積層と考えられる。①～④層まではほぼ全面に堆積しているが、⑪層は西南端から約５m付近から緩やかに下がっており、基盤層の⑫層に続いている。下がった部分には⑤・⑥層が堆積している。

③・③－２層からは14世紀の瓦器碗の小破片が僅かに出土するが、近世の陶磁器が認められる。④・⑤層からは14世紀の瓦器・土師器の小破片が極少量出土するが、ほとんど無い。⑥層からは13・14世紀の瓦器の破片とともに瓦も出土した。

遺構は溝状のものを４条検出したのみである。⑪層から⑫層に替わる傾斜変換点付近にあり、等高線に並行している。調査区外の北から南に３条並行して伸びており、トレンチ中央部で途切れる。最も西の１条は途切れているが、延長上に溝状遺構が１条続いている。幅は0.25～0.6mとまちまちであるが、深度は0.03～0.07mと非常に浅い。埋土は黒褐色粘土と⑪層の黄色粘土が混じっており、ブロック状を呈するようにもみえるが、人為的ではないようである。遺物は出土しなかった。

第２調査区

第１調査区の北東に隣接する水田に設定した幅2.0m、長さ21.0mの調査区である。水路部分の調査であるため、第１調査区の延長上にある。水田面の高さはＴ．Ｐ．＋82.6～82.65mであり、第１調査区よりも約0.3m低い。

堆積層は７層あり、上から①灰黒色土が0.2m、②茶褐色砂が0.15～0.1m、③黄色土・灰色土互層が0.1m、③－２黄色土・灰色土互層（黄変色）が0.2m、④灰色土が0.15m、⑤灰黒色土が0.1～0.2m、⑥黒灰色粘土が0.1～0.2m堆積しており、⑫灰色粘土の基盤層となる。⑫層上面の標高は南西側でＴ．Ｐ．＋81.65m、東北側でＴ．Ｐ．＋81.45mを測り、0.2m低くなっている。全体に同じ土が堆積しているが、②・③・③－２・④層下面はほぼ平坦で、その他は東北側が低くなっている。

遺構は検出しなかった。遺物は③－２層から瓦器碗と土師器の小片が少量、⑥層から土師器の羽釜が出土した。

第３調査区

第１・２調査区の延長上に並ぶ幅2.0m、長さ18.0mのトレンチである。調査区の形状は東北端で東南方向に直角に屈曲するのであるが、屈曲した部分は第４調査区として分離した。水田面

の高さはT．P．+82.4mであり、第2調査区よりも0.2m低い。

堆積層は5層あり、上から①灰黒色土が0.2m、②茶褐色砂が0.05～0.1m、③黄色土・灰色土互層が0.15～0.1m、⑤灰黒色土が0.15～0.2m、⑥黒灰色粘土が0.15m堆積しており、⑫灰色粘土の基盤層となる。⑫層上面の標高は南西側でT．P．+81.65m、東北側でT．P．+81.45mを測る。全体に同じ土が堆積している。①・③層下面はほぼ同じ高さであるが、その他は東北側が0.05m低くなっている。

遺構は検出しなかった。遺物は⑥層から瓦器・土師器の細片を出土しただけである。

第4調査区

第3調査区東北端から直角に屈曲し東南方向に伸びる幅2.0m、長さ14.0mトレンチである。水田面の高さは第3調査区と同じ水田であるため、T．P．+82.4mである。

堆積層は第3調査区と同じであるが、東南端の方が第3・4調査区交点付近よりも僅かに高い。遺構は⑤層下面で畦の痕跡を確認した。畦はほぼ南北に伸びていたようである。幅0.8～1.2mで確認長約6mを測る。現在の水田とはまったく異なった地割で当地域の水田開発が始まったようである。遺物は⑥層から土師器の羽釜・瓦器碗等が少量出土した。

第5調査区

第3・4調査区東南に隣接する水田に第4調査区の延長上に並ぶ幅2.0m、長さ14.0mトレンチである。水田面の高さはT．P．+81.7mであり、第4調査区より0.7m低い。

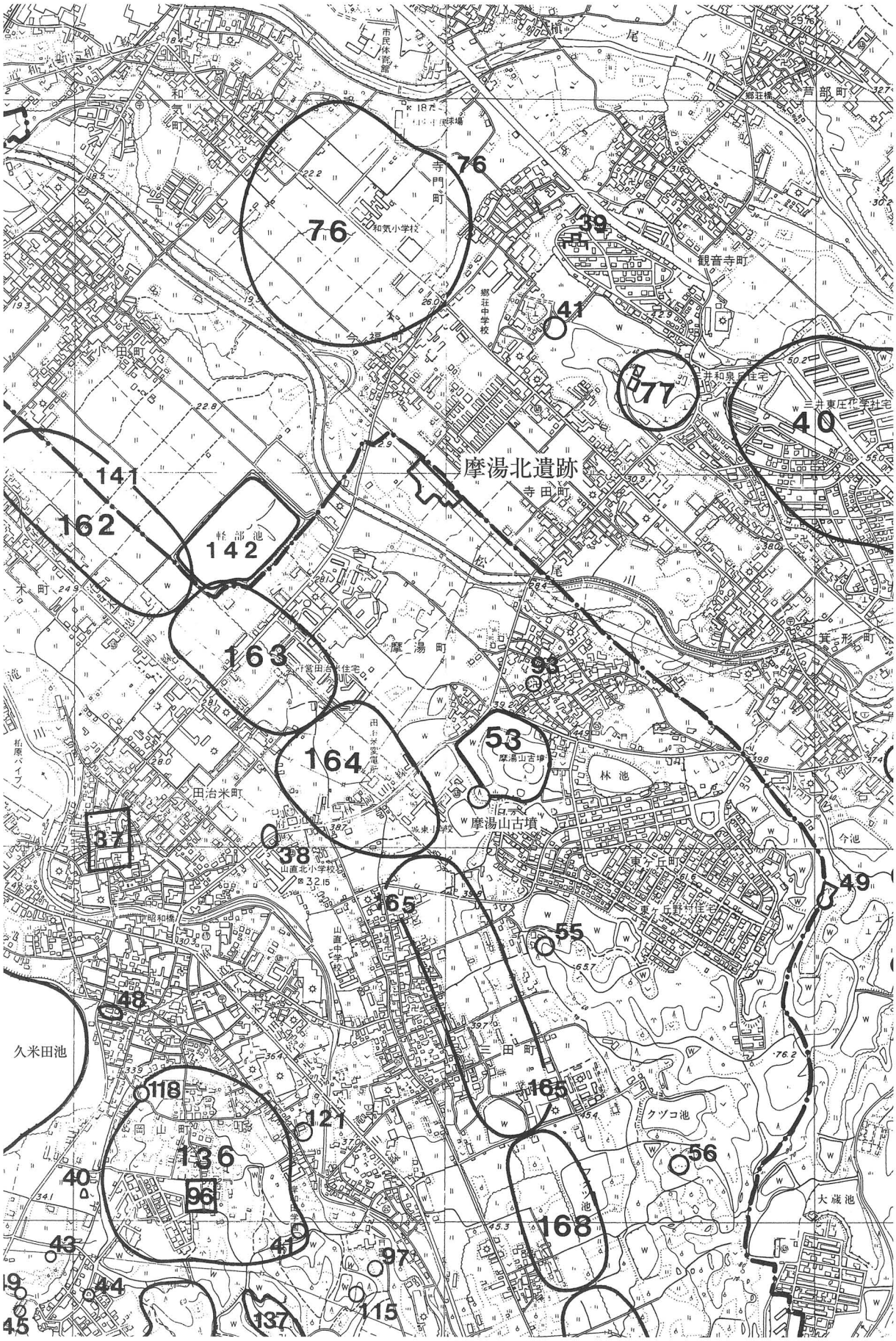
堆積層は西北端では3層あり、上から①灰黒色土が0.15m、②茶褐色砂が0.05m、③黄色土・灰色土互層が0.2m、③－2黄色土・灰色土互層（黄変色）が0.2mあり、⑫灰色粘土の基盤層となる。⑫層上面の標高はT．P．+81.1mである。東南端では7層あり、上から①灰黒色土が0.15m、②茶褐色砂が0.1m、③黄色土・灰色土互層が0.15m、③－2黄色土・灰色土互層（黄変色）が0.1m、⑦灰色土が0.15m、⑧黄色土が0.05m、⑨褐色砂礫が0.2m、⑩褐色砂が0.55m堆積しており、⑬青灰色礫混粘土の基盤層となる。⑬層上面の標高はT．P．+80.25m測る。トレンチ中央部から極端に低くなっている。調査地の東側を矩谷川が流れており、旧の流路のようである。

遺構としては旧流路を確認しただけである。遺物は③－2層から瓦器碗と土師器の小片が少量出土した。

第6調査区

第3・4調査区と同じ水田内の北側に設定した幅10.0m、長さ13.5mの調査区である。水田面の高さはT．P．+81.7mである。

堆積層は6層あり、上から①灰黒色土が0.15～0.2m、②茶褐色砂が0.05m、③黄色土・灰色土互層が0.1m、③－2黄色土・灰色土互層（黄変色）が0.15mあり、④灰色土が0.2m、⑥黒灰色粘土が0.1～0.2m堆積しており、⑫灰色粘土の基盤層となる。⑫層上面の標高は南西側でT．P．+81.6m、東北側でT．P．+81.55mを測り、僅かに東北側が低くなっている。⑥層は東北側が厚く堆積しているが、②～④層は全面にほぼ均一に堆積している。第2調査区と非常によく似



第６図　摩湯北遺跡位置図

た堆積状況を示している。

遺構は検出しなかった。遺物は⑥層から瓦器・土師器の細片を出土しただけである。

第２節　まとめ

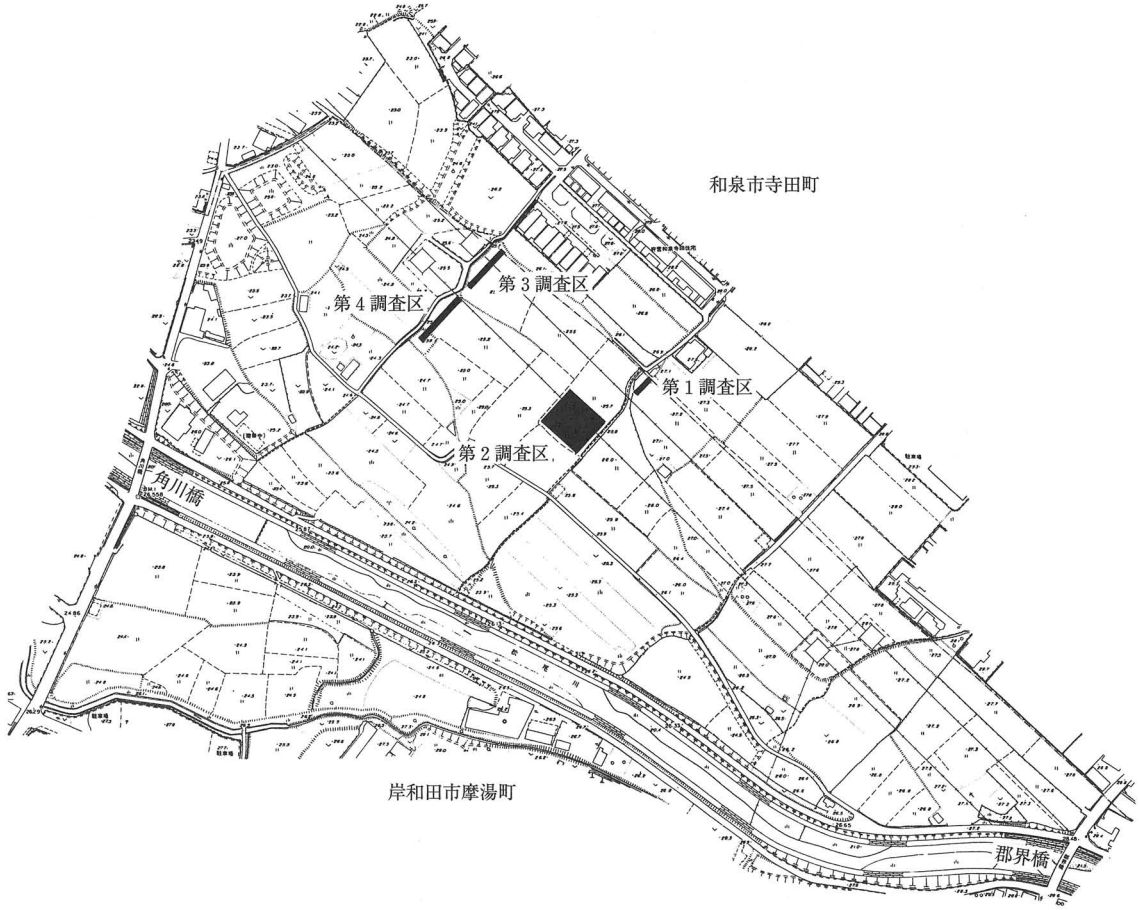
調査地域の東端は中世以前の矩谷川が流れていたことが判った。北側は谷の中央部分に近く、人間の手が加えられなかった時間が長かったようである。最初に人間の痕跡が伺えるのは南側の第１調査区を設定した水田部分と思われる。今回はこの水田の西端部のみの調査であったため、明確な遺構を検出し得なかった。この水田の西側に沿って熊取へ抜ける旧道があり、その関係から、谷の南端の旧道沿いに何らかの遺構が検出される可能性は十分に考えられる。

第３章　摩湯北遺跡発掘調査

第１節　調査結果

第１調査区

調査地域の東端に東北から西南方向に幅2.4m、長さ12.0mで設定した小規模な調査区である。水田面の標高はＴ．Ｐ．＋25.6mを測り、南・西側よりは１段高く、ここから北の和泉市側は全体



第７図　発掘調査区配置図

に高くなっている。西北すぐ横の段下を現在の水路が北東から南西方向に流れている。この水路の付け替え場所である。

基本的な堆積土は3層で、上から①灰黒色土が0.2m、③灰白色土が0.25m、⑤－2黄灰色土が0.15あり、⑧－2褐色粘土の基盤層となる。段丘上であり、調査区西北側と西南側は段丘崖が検出され、西南角部では0.5m低くなっている。そこに下から⑥茶褐色粘土が0.3m、流れ込んだ⑤－2層が0.15mが堆積している。⑤－2層上面の窪みに④－2層が溜まっている。④－2層は⑤－2層とほとんど同じであるが、人為的に埋められたようで、ブロック状になっている。

遺構としては段丘崖を検出しただけである。遺物は瓦器碗を出土した。

第2調査区

第1調査区の南西約20mのところに幅26.0m、長さ23.0mで設定した長方形の調査区である。水田面の標高はT.P.+24.4mを測る。東南すぐ横を現在の水路が北東から南西方向に流れている。

堆積土は上から①灰黒色土が0.15m、②黄色粘土が0.05m、③灰白色土が0.15m、④黄色粘土が0.15m、④－2黄灰色土が0.1m、⑤黄灰色土が0.15m、⑥－2灰褐色粘土が0.1～0.15m⑦黄白色粘土が0.1～0.15m堆積しており、⑧黄茶色粘土の基盤層となる。⑧層上面の標高はT.P.+23.5mを測る。

遺構は⑤層を除去した面で調査区東南辺の幅約3mが0.1m高く残り、壇状になった。壇状部分は調査区域外に続くため詳細は不明である。⑦層を除去した面で⑧層を彫り込んだ溝SD0001を検出した。

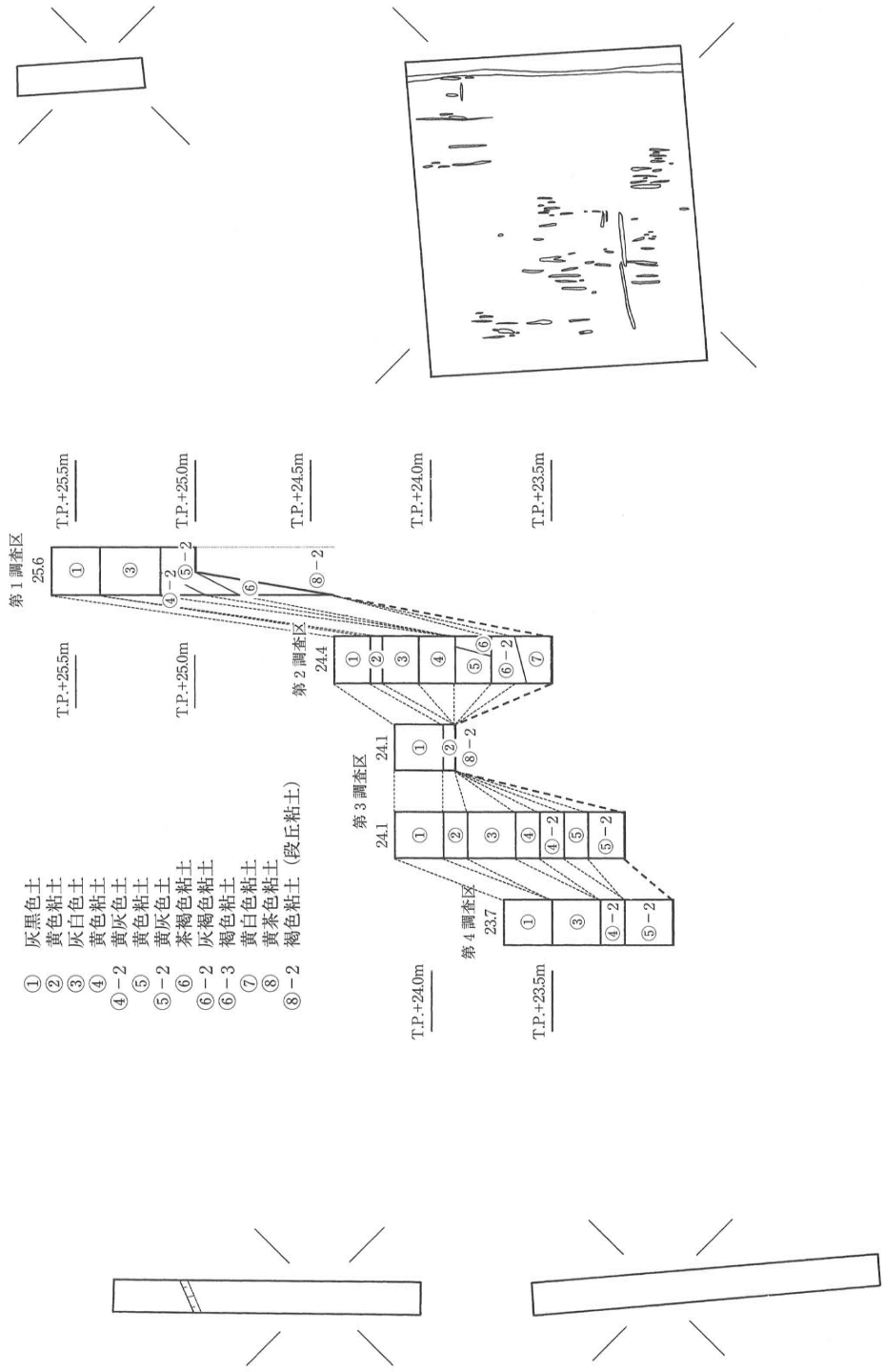
SD0001は幅0.3～0.6m、深度0.15～0.25mで埋土は灰褐色土であり、部分的に底部に灰色粘土が薄く堆積している。現在の水路に平行しており、当地域の最初の開発に関係する溝と考えられる。現在の水路からは約3m離れているが、開発当初から現在の地割りがある程度できあがっていたものと考えられる。

遺物は須恵器の杯蓋（図版11の5番）、須恵器の杯身（図版11の9番）、等古墳時代のものから青磁（図版12の18～20番）、東播系の須恵質擂り鉢（図版11の6・7番）、瓦質の擂り鉢（図版12の16番）、瓦器碗（図版12の11～13番）等が出土した。

第3調査区

第2調査区の北西約80mのところに幅2.4m、長さ25.0mで設定した細長い調査区である。水田面の標高はT.P.+24.1mを測る。水路部分の調査であり、西北すぐ横を現在の水路が北東から南西方向に流れている。

堆積土は北東端部と南西端部とでは異なっている。北東端部は2層で、上から①灰黒色土が0.2m、②黄色粘土が0.05mあり、⑧－2褐色粘土の基盤層となる。⑧－2層上面はT.P.+23.9mを測る。段丘上であり、調査区北東端約7mがこの状況である。西南部は上から①灰黒色土が0.2m、②黄色粘土が0.05m、③灰白色土が0.2m、④黄色粘土が0.1m、④－2黄灰色土が0.1m、⑤黄灰色土が0.1m、⑤－2黄灰色土が0.15m堆積しており、⑧黄茶色粘土の基盤層とな



第8図　遺構平面図、基本土層断面模式図

る。⑧層上面の標高はT．P．+23.2mを測り、北東端部より0.7m低くなっている。

遺構としては段丘崖を検出しただけである。遺物は瓦器碗を出土した。

第4調査区

第3調査区の延長線上南東約10mのところから幅2.4m、長さ28.0mで設定した細長い調査区である。水田面の標高はT．P．+23.7mを測る。南西端部約5mは別の水田であるが、約1mの盛り土があり、畦等を覆っている。旧水田面の標高はT．P．+23.7mを測る。水路部分の調査であり、西北すぐ横を現在の水路が北東から南西方向に流れているのは第3調査区と同じである。

堆積土北東端部と南西端部とでは異なっている。北東端部は7層で、上から①灰黒色土が0.2m、②黄色粘土が0.1m③灰白色土が0.2m、④－2黄灰色土が0.1m、⑤－2黄灰色土が0.2mあり、⑧黄茶色粘土の基盤層となる。⑧層上面の標高はT．P．+23.0mを測り、北東端部より0.2m低くなっている。

遺構は検出しなかった。遺物は、盛り土から現代の瓦、④－2・⑤－2層から瓦器碗・瓦器小皿（図版12の14番）・土師器の小破片を出土した。

第2節　まとめ

①層は現在の水田耕作土であり、②層は床土、③層は近世以降の耕作土、④・④－2層は近世の耕作土、⑤・⑤－2・⑥・⑥－2・⑦層は中世の耕作土と考えられる。遺物は図版の5・8・9・10等古墳時代以降の須恵器もあり、周辺に古墳時代以降人々が住んでいたのであろうが、今回の調査範囲よりも北東側の松尾川からも離れた段丘上に当たる和泉市域に居住していたと考えられる。中世以降確実に水田として開発しているが、川に最も近い部分は比較的新しく、川の堤防がしっかりしてからのようである。第1・3・4調査区横の水路は間隔が約100mあり、条里地割りの坪境である。第3・4調査区では関連するような遺構はなにも検出しなかったが、第2調査区では⑤層下面で水路に沿って壇上部分、⑦層下面で水路に沿って溝が検出されたことから、当地域の条里地割りが確実に中世までは遡ることが明らかになった。中世以降現在まで水田として利用され続けてきた地域のようである。

報　告　書　抄　録

ふりがな	むつおいせき・むつおみなみいせき・ばばささかいせき・まゆきたいせき
書名	六尾遺跡・六尾南遺跡・馬場笹カ遺跡・摩湯北遺跡
副書名	農用地総合整備事業六尾・馬場・摩湯団地
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査概要
シリーズ番号	1998－3
編著者名	藤澤真依
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目　ＴＥＬ06－6941－0351
発行年月日	2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
むつおいせき 六尾遺跡 むつおみなみいせき 六尾南遺跡	せんなんし 泉南市 むつお 六尾	27222		34.20.34 34.20.24	135.17.28 135.17.41	2000年11月 ～12月	117	農用地総合整備事業
ばばささかいせき 馬場笹カ遺跡	かいづかし 貝塚市 ばば 馬場	27208		34.23.15	135.23.19	2000年12月 2001年3月	330	農用地総合整備事業
まゆきたいせき 摩湯北遺跡	きしわだし 岸和田市 まゆちょう 摩湯町	27202		34.27.54	135.26.02	2000年12月 2001年3月	754	農用地総合整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六尾遺跡 六尾南遺跡	散布地	古墳時代～近世		土師器・須恵器・瓦器・陶磁器	
馬場笹カ遺跡	集落跡	中世～近世	溝	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦	
摩湯北遺跡	集落跡	古墳時代～近世	溝	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器	

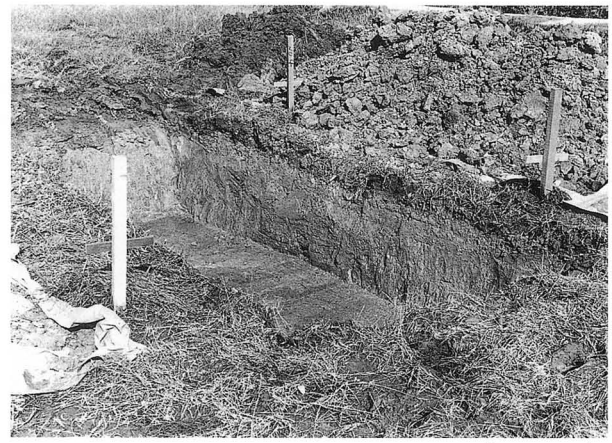
図　　版

図版一　六尾遺跡試掘トレンチ

第1トレンチ

第2トレンチ

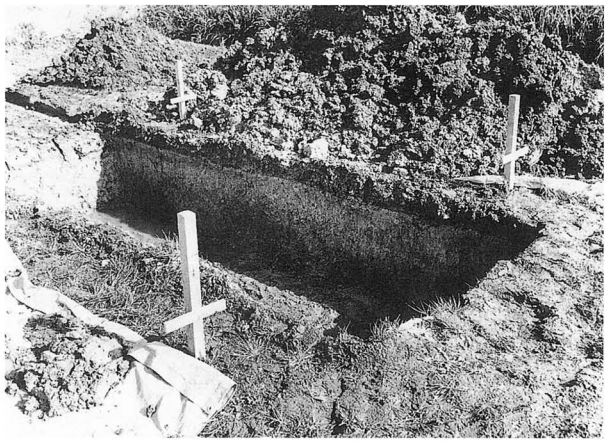
第3トレンチ



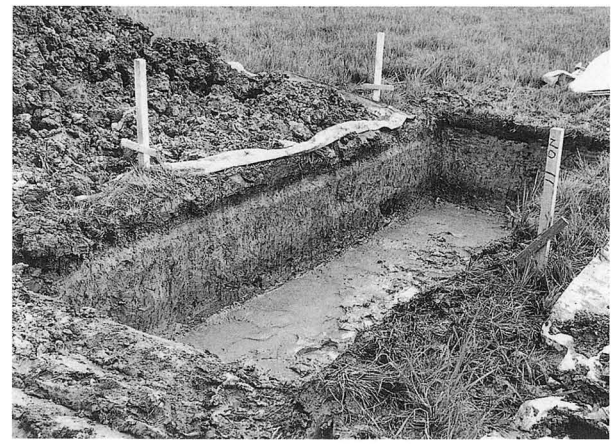
第4トレンチ

第8トレンチ

第9トレンチ



第10トレンチ

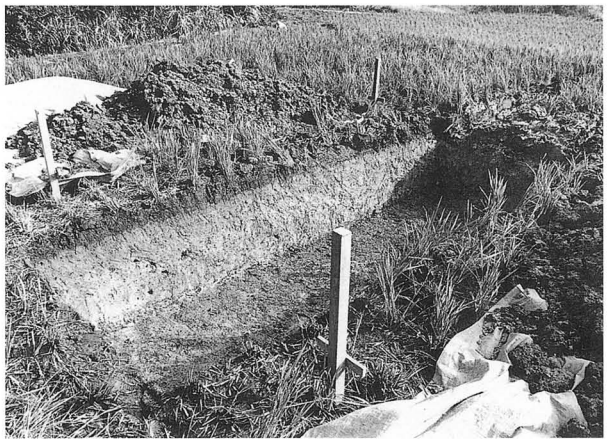


第11トレンチ

図版二　六尾遺跡、六尾南遺跡試掘トレンチ

第12トレンチ

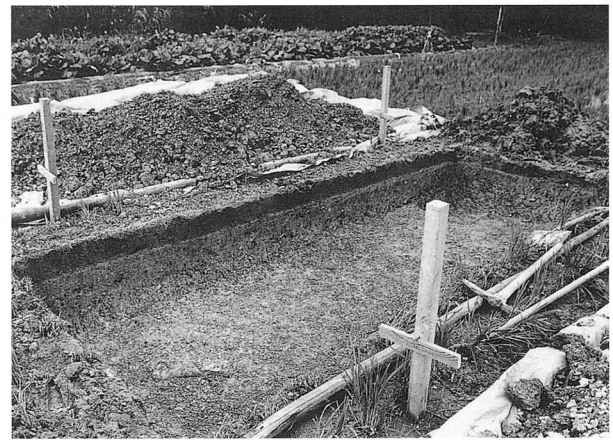
第13トレンチ



第14トレンチ

第15トレンチ

第16トレンチ



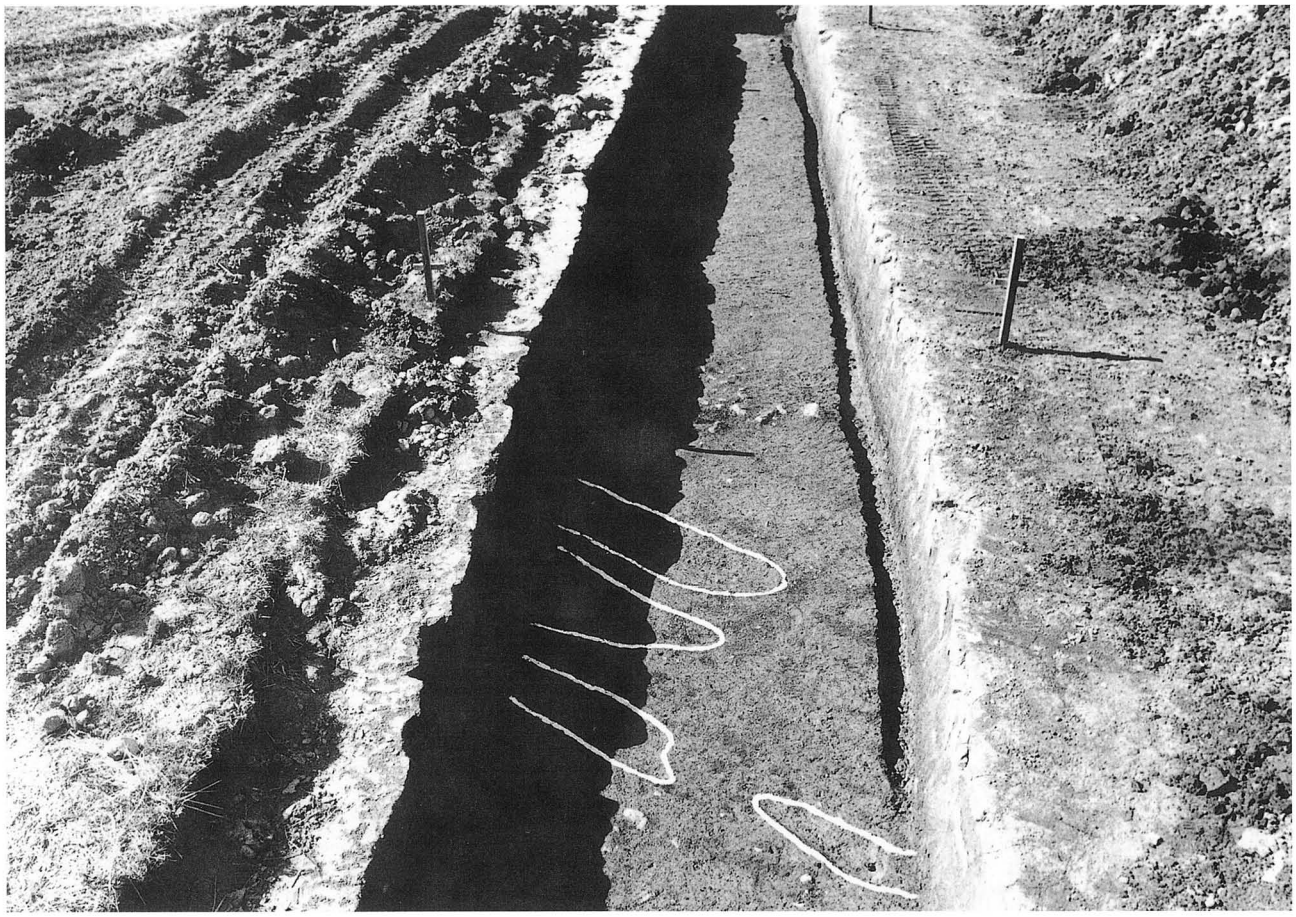
第18トレンチ

第19トレンチ

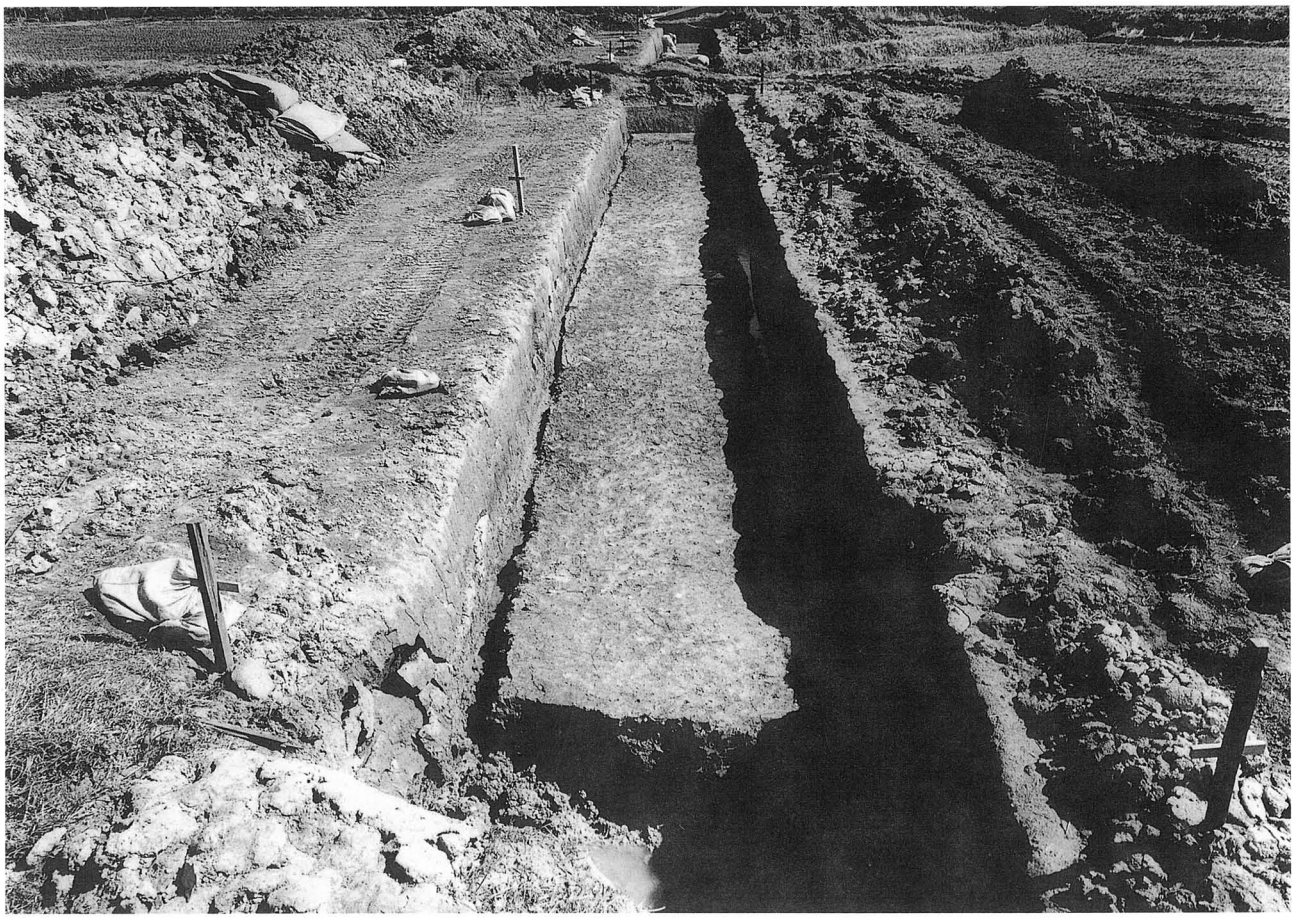
第20トレンチ

図版三　馬場笹カ遺跡航空写真

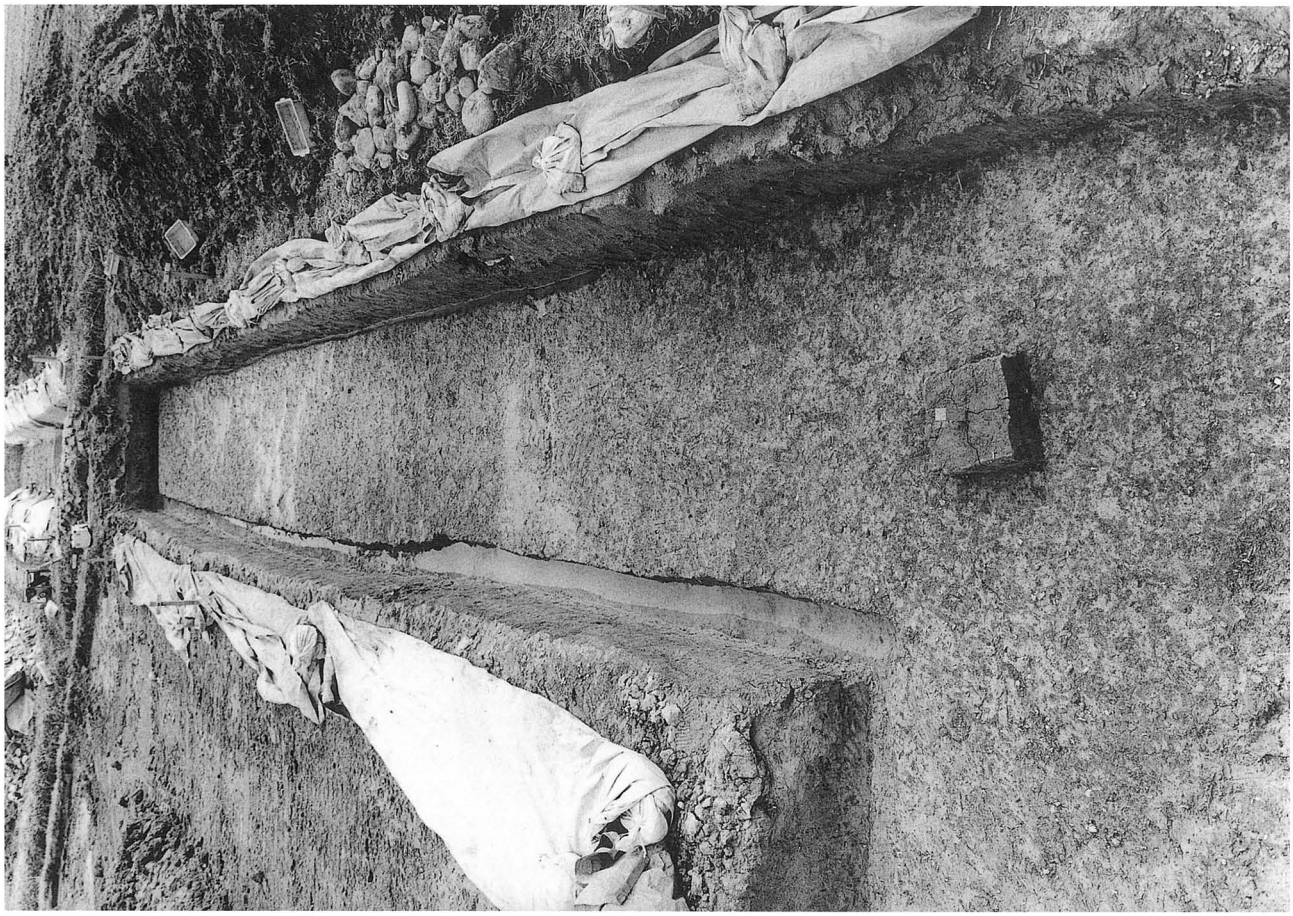
図版四　馬場笹カ遺跡



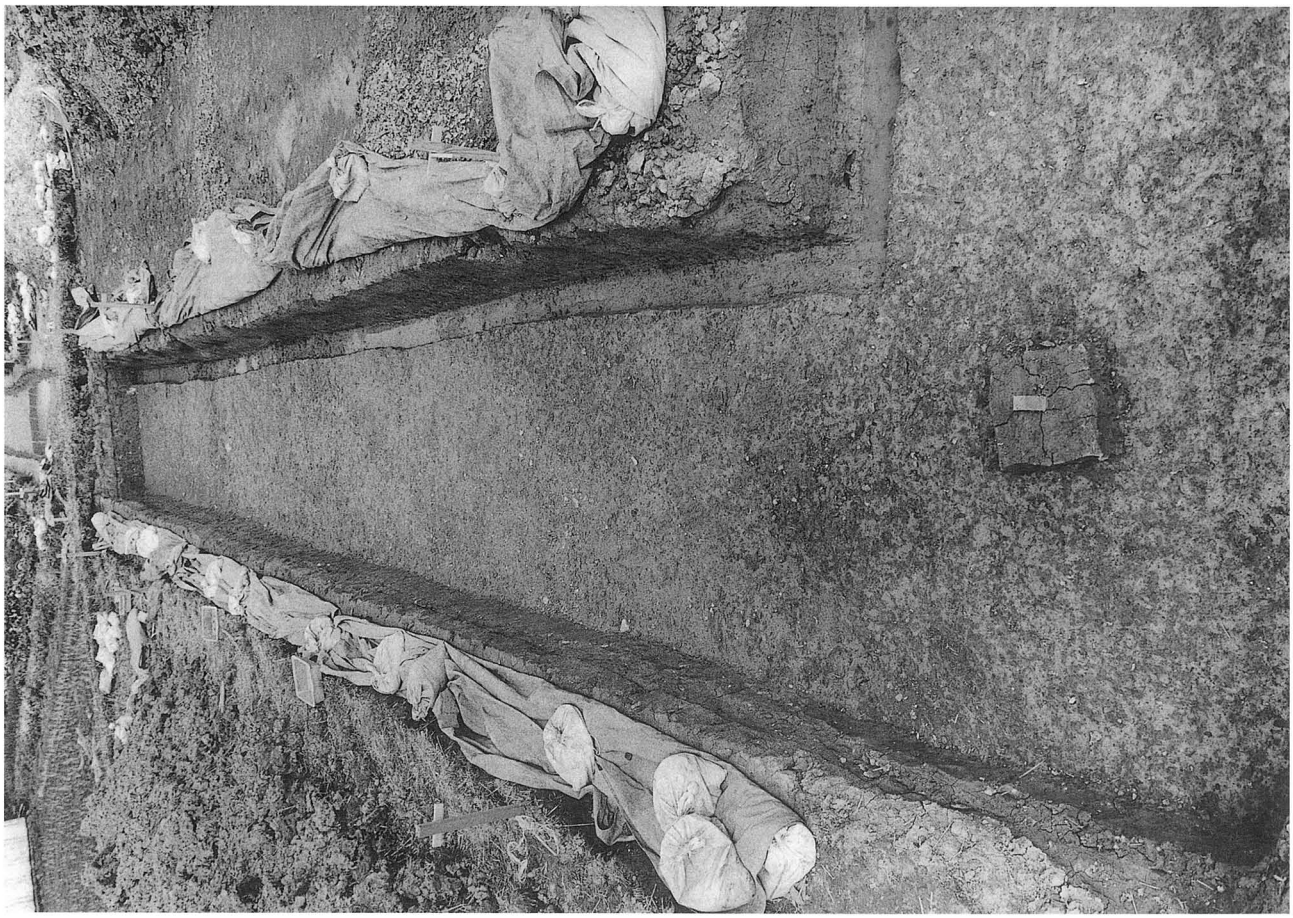
第１調査区（東南から）



第２調査区（西北から）



第 3 調査区（西北から）



第 4 調査区（西南から）

第5調査区（西南から）

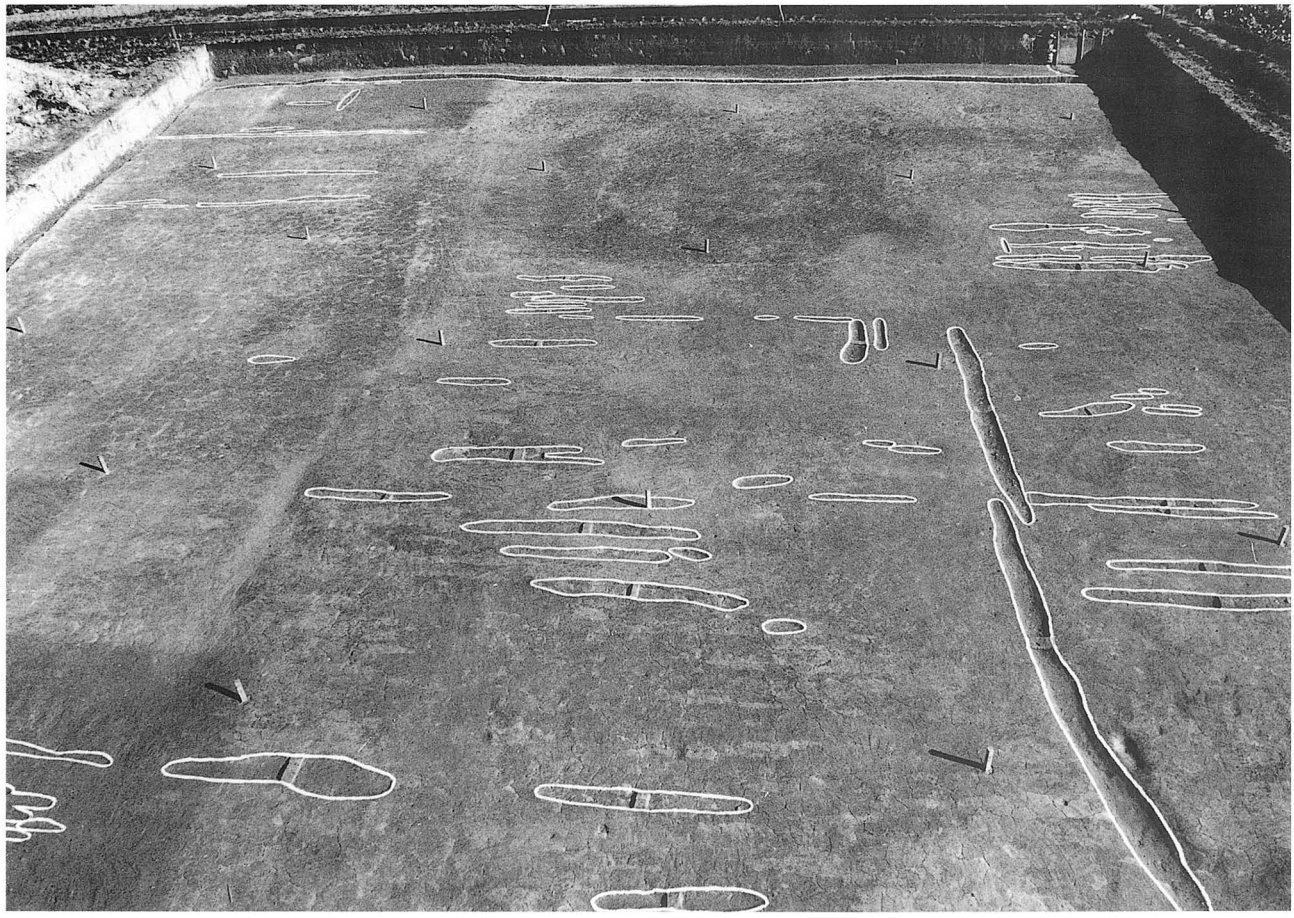
第6調査区（北から）

図版七　摩湯北遺跡航空写真

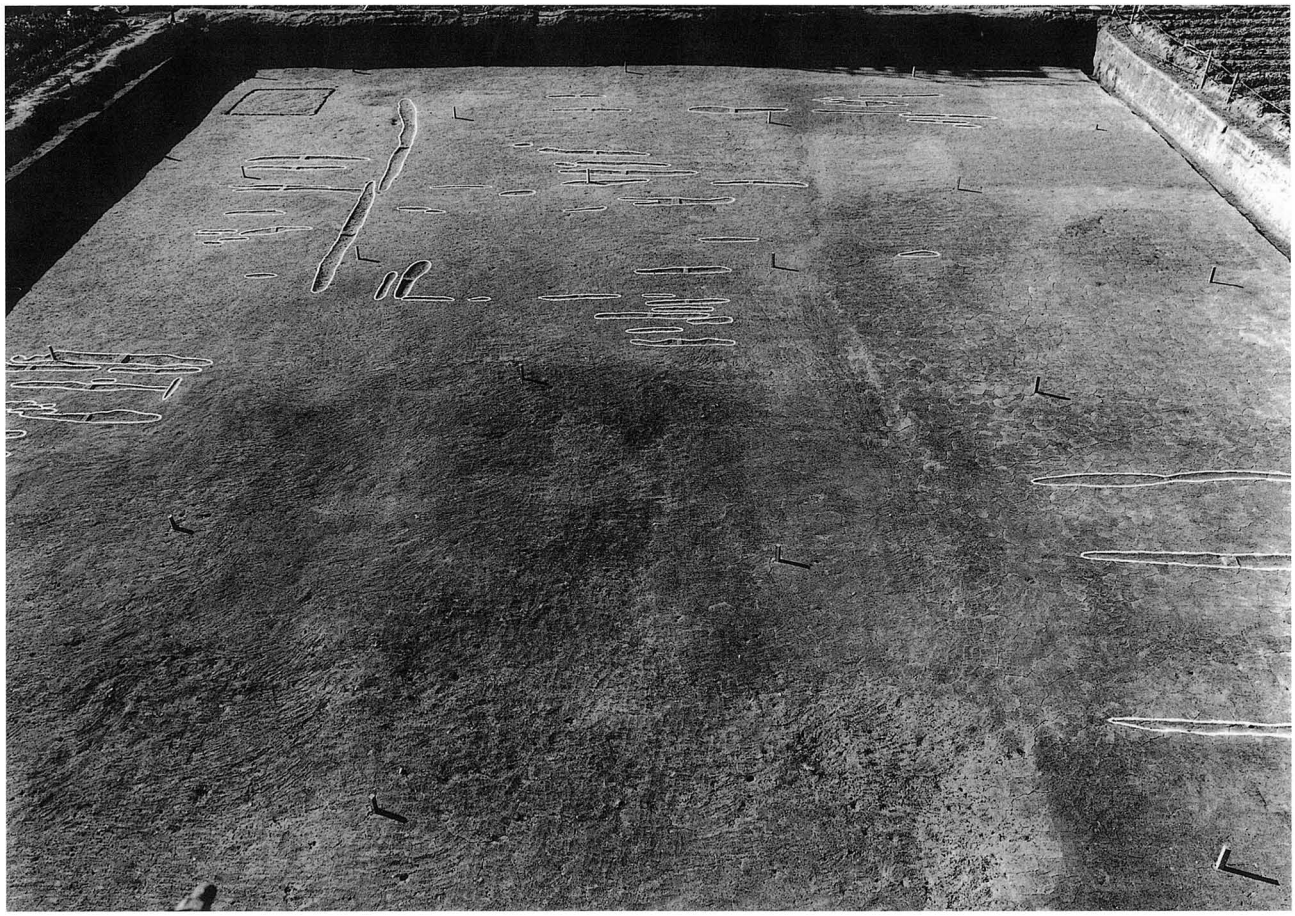
第 4 調査区　　第 3 調査区

第 2 調査区　　第 1 調査区

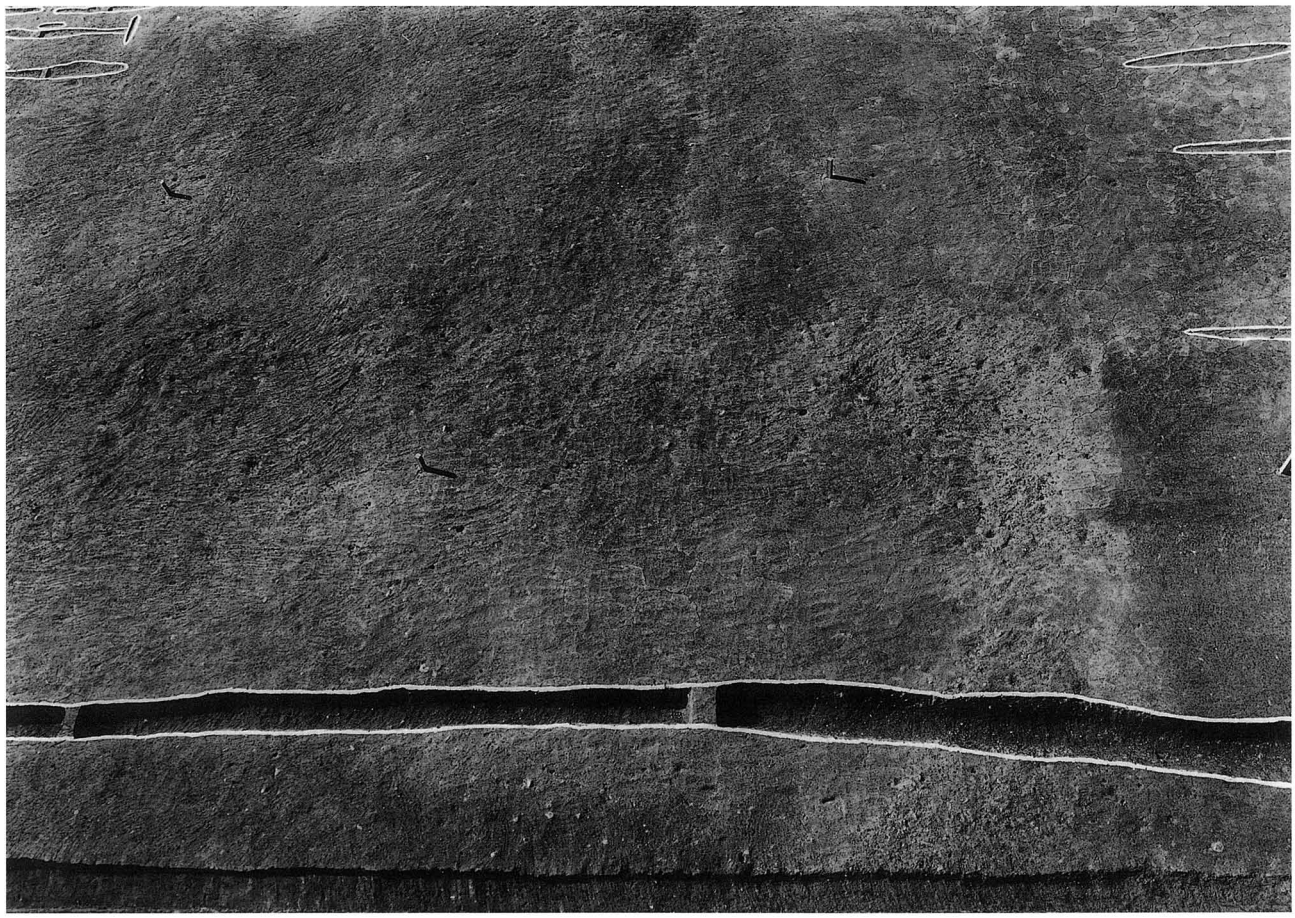
第１調査区（西南から）



第２調査区（西北から）

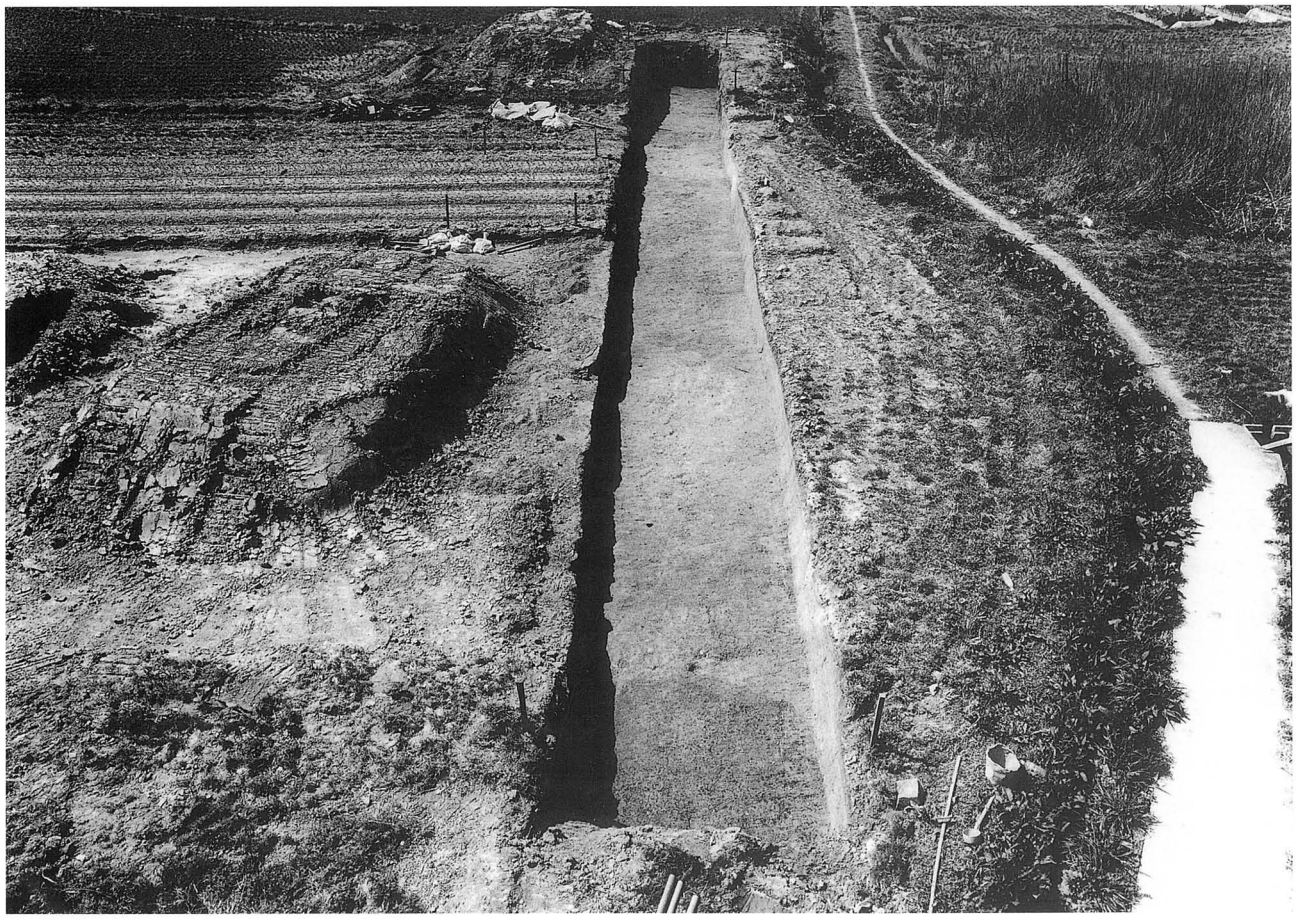


第２調査区全景（東南から）

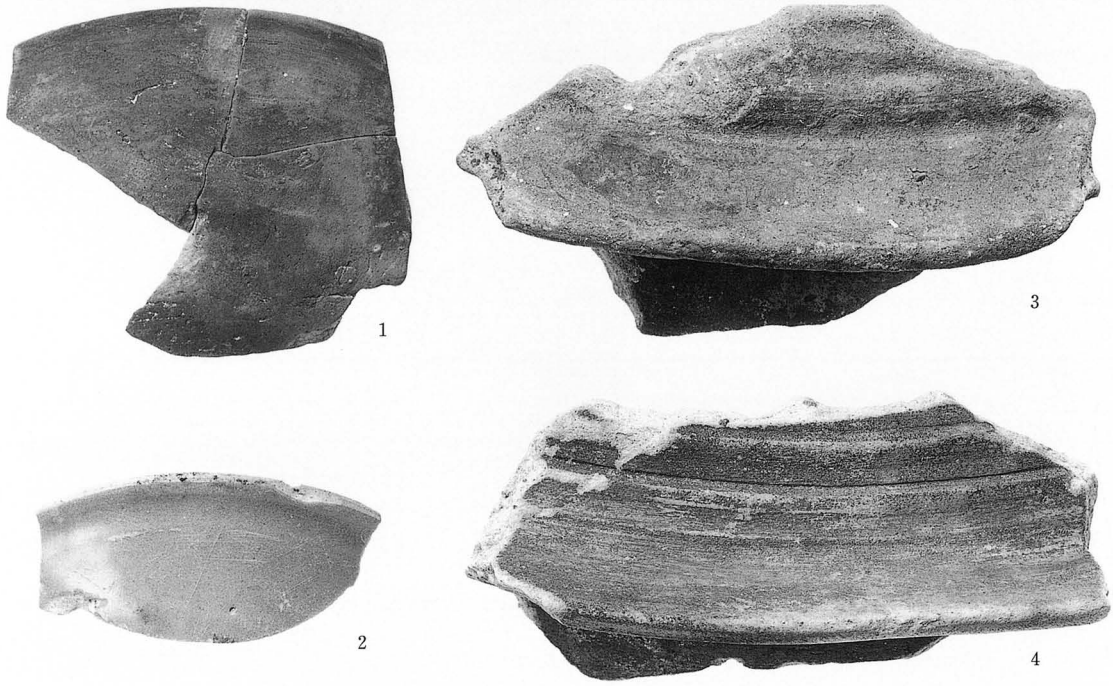


第２調査区ＳＤ001（東南から）

第3調査区全景（西南から）

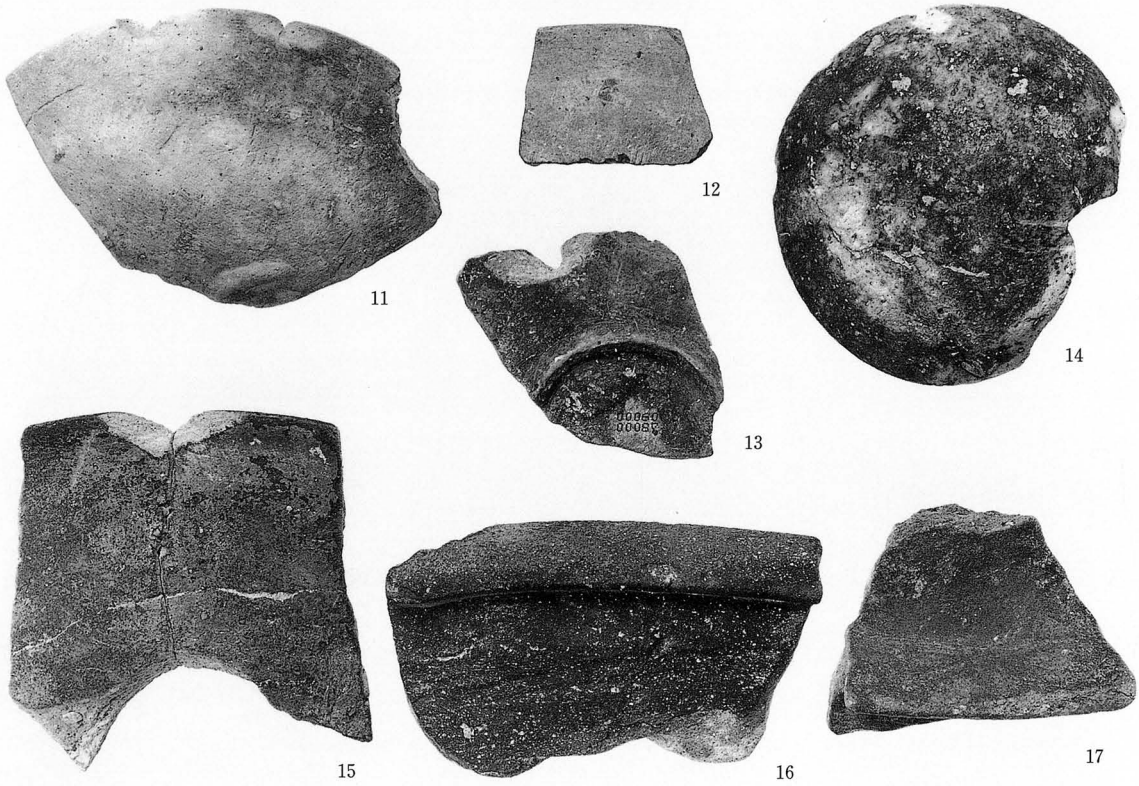


第4調査区全景（東北から）

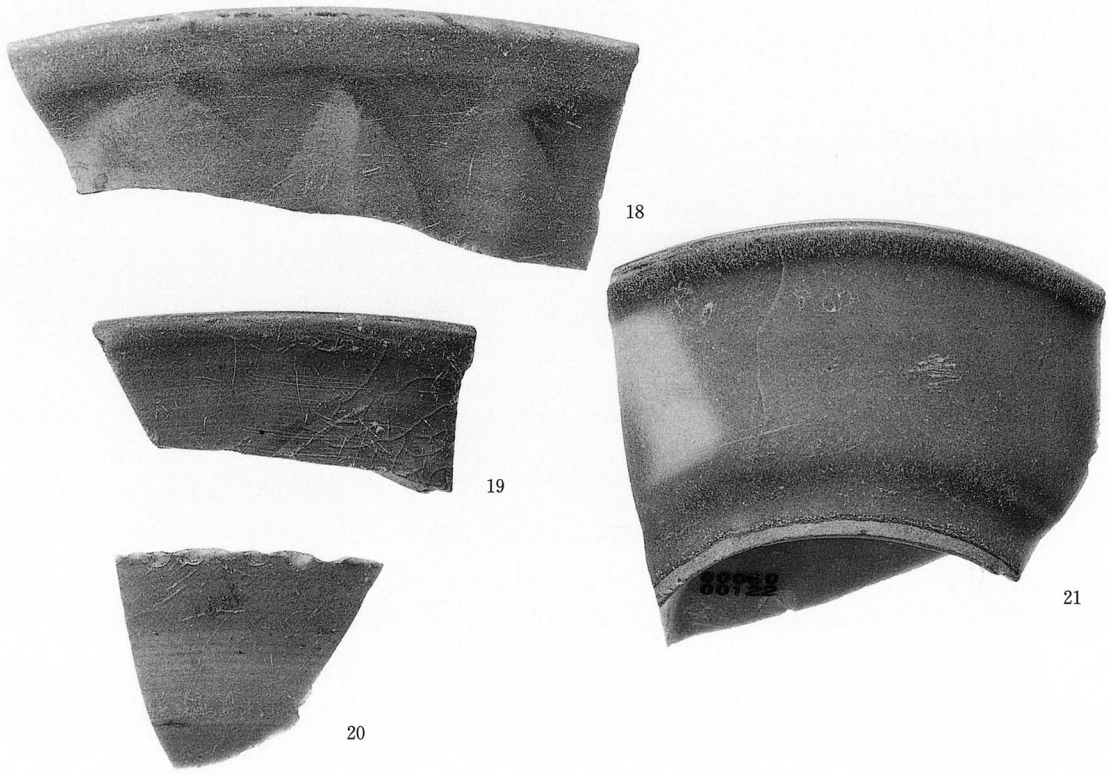


馬場笹カ遺跡出土遺物

摩湯北遺跡出土遺物



摩湯北遺跡出土遺物



摩湯北遺跡出土遺物

六尾遺跡・六尾南遺跡試掘調査
馬場笹カ遺跡・摩湯北遺跡発掘調査概要

－ 農用地総合整備事業六尾・馬場・摩湯団地 －

発　行　　大阪府教育委員会
〒540－8571
大阪市中央区大手前２丁目
TEL．06－6941－0351
発行日　　2001年３月
印　刷　　株式会社　中島弘文堂印刷所
〒537－0002
大阪市東成区深江南２－６－８